

地域住民の階層意識と 地域の人間関係に対する認知及び 外国人に対する受容度の関係

大東建託株式会社 賃貸未来研究所 所長

宗 健

要約

人口減少が社会課題になっていることから、住民の階層意識や地域の人間関係に対する認知、外国人に対する受容度との関係を、全国の自治体を対象として約18万人から回答を得た住みこちランキングデータを使って検討した。

回答者個人単位の記述統計分析、居住自治体毎の記述統計分析、階層意識と外国人受容度に対するロジスティック分析の結果からは、自分が上流だと思うという回答者比率が10.2%、下流だと思うという回答者比率が36.0%と階層意識の分離が一定程度あることが分かった。外国人が自分の住んでいる地域に住むことに対する受容性も、ハイスکیل外国人に対しては34.0%だが、単純労働外国人に対しては24.3%と差があることも分かった。

また、個々人の単位でみれば、階層意識と外国人受容度には相関があまりないが、個々人の集合体としての自治体毎で集計した数値では一定の相関があることが分かった。

もとより社会のなかで格差が拡大すること、階層意識が分離し固定化することは望ましいことではないが、本研究の分析結果は、自治体を一つの経営体として考えた時、外国人をどのように受入れていくか、多面的に検討する必要があることを示唆している。

キーワード

階層意識、人間関係、外国人受容、ロジスティック回帰

I. 研究の背景と目的

日本の人口は既に減少し始めており、大都市圏の一部の自治体を除けば、どこも人口を維持する・増やすことに躍起となっている。しかし高齢になると社会移動率は大きく低下し、既に全人口の平均年齢が50歳近くになっている現状では、30歳代の子育て世帯を近隣自治体で奪い合う構造となっている。

その中で新型コロナ禍によって大きく減少しているとはいえ、外国人住民を受入れることは人口を増やす・維持する・減少を抑制することに対して重要な観点となっている。

こうした状況は自治体を一つの経営体として考えれば、顧客を誰にするのか、というマーケティングの課題であるが、外国人の積極的な受入れは既存顧客である現住民の反発を買う恐れもある。

そのため住民属性によって外国人に対する受容度がどのように変化するのか、しないかを定量的に把握することは自治体の経営戦略に対して有益な基礎情報となる可能性がある。

また、近年拡大したとされる世代間、地域間の格差に関する情報も自治体経営に重要であると考えられる。

そのような背景から、本研究では、大規模なアンケートデータから地域住民の階層意識と新しい住民を受入れる際に大きく影響すると考えられる地域の人間関係の認知及び外国人に対する受容度がどのような関係にあるのかを明らかにすることを目的とする。

II. 先行研究のレビュー

本研究の主題である外国人に対する受容度に関する研

究には、集団間の移動志向性の高さと同人間関係の開始スキルの高さ同外国人受容に繋がることを示した向井・井上(2010)、自尊心の低い人は外国人に対する受容度が低いことを示した向井(2007)、年齢が上昇すると外国人受容度が下がることを示し、「日本人は総じて西欧先進国の白人には好意的態度を示すが、黒人や朝鮮民族には非行為的な態度を示すという知見も存在する(中村(1999))」と同指摘した安達(2008)といった研究がある。

階層意識に関する研究では、永吉(2018)がまとめているように階層意識そのものが社会課題として捉えられてきた傾向が強いが、学歴・職業・収入や生活水準が階層意識を規定していることを示した中尾(2002)、所得水準といった地域の状況が階層帰属意識に影響を与えているが、地域特性によって階層帰属意識の規定要因が異なっていることを示した小林(2004)といったものがある。

しかし、本研究のように階層意識と同地域の間人関係に対する認知及び外国人受容度を組み合わせた研究は新しい視点での研究であり、独自性と社会的意義があると考えられる。

III. 研究の方法

1. 使用するデータ

本研究では、大東建託賃貸未来研究所が実施・発表している「街の住みこち&住みたい街ランキング(以下「住みこち調査」という)」の個票データを使用する。

住みこち調査データには、回答者の個人属性(性別・年齢・年収や資産・家族形態・居住形態等)、居住地域の評価に関する60項目の設問、居住している住宅の評価に関する30項目の設問、回答者の自己認知・価値観・性格・街への志向性に関する108項目の設問、日常生活やライフスタイルに関する100項目の設問等が含まれている。

調査は2019年・2020年・2021年・2022年の4回行われているが、本研究では最も設問数の多い2022年のデータを用いる。調査は2022年3月8日～29日にインターネット経由で行われ、調査票の配布回収は株式会社マクロミルが

行い回答者数は18万1,111名である。

2. 研究の枠組み

本研究の枠組みは4つの分析で構成されている。

まず、2021年の住みこち調査データを元に回答者の記述統計量、分析対象とした階層意識に関する「自分は世の中では上流だと思う(上流意識)」「自分は世の中では下流だと思う(下流意識)」という設問、地域の間人関係に対する認知に関する「今住んでいる街は、人間関係が濃密だ(人間関係が濃密)」「今住んでいる街には、自分と似たような属性の人が多同(自分と似た人が多同)」という設問、外国人の受容度に関する「ハイスキルの外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ(ハイスビル外国人を受容)」「単純労働に従事する外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ(単純労働外国人を受容)」という計6項目の記述統計量を確認する。

次に50名以上の回答者があった自治体を対象として6項目の設問に対する記述統計量を集計し、その設問間の相関係数を算出し、その関係を把握する。

そして、自治体毎の結果と比較するために、回答者個人毎の6項目に記述統計量を集計し、その変数間の相関係数を算出し、自治体毎に集計した結果と比較する。

その上で、階層意識、外国人受容度を目的変数としたロジスティック回帰分析を行い、その構造を分析する。最後に考察を加え今後の課題を述べる。

IV. 分析結果

1. 回答者の記述統計量

表-1は住みこち調査の回答者属性の記述統計量および区分値の比率である。

年収は1億以上、金融資産は10億以上を異常値として削除している。年齢については76歳以上を削除している。

表-2は分析対象とした6項目の設問に対する回答の分布である。

表-1 回答者属性の記述統計量および区分値の比率

項目	平均	標準偏差	最小	最大
年齢	44.66	13.62	20	75
個人年収	307.425	335.171	0	9,999
世帯年収	557.409	453.920	0	9,999
個人金融資産	639.670	2132.462	0	99,999
世帯金融資産	981.829	2846.129	0	99,999
主観的幸福度	6.54	2.09	1	10

項目	比率
男性	45.9%
既婚	61.9%
子どもあり	41.5%
地元出身	44.8%
大卒以上	41.8%
持ち家	49.5%

年収・金融資産の単位は万円
総回答者数は18万1,111名

表-2 階層意識, コミュニティへの意識, 外国人受容意識の回答分布

	そう思う+ どちらかとい えばそう思う	そう思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらでも ない	どちらかと いえばそう思 わない	そうは 思わない
自分は世の中では上流だと思う (上流意識)	10.2%	1.9%	8.3%	35.3%	23.8%	30.7%
自分は世の中では下流だと思う (下流意識)	36.0%	15.7%	20.3%	41.4%	14.9%	7.7%
今住んでいる街は、人間関係が濃密だ (人間関係が濃密)	19.5%	3.6%	15.9%	46.3%	22.7%	11.5%
今住んでいる街には、自分と似たような 属性の人が多く (自分と似た人が多い)	26.0%	5.0%	21.0%	50.5%	14.8%	8.6%
ハイスキルの外国人が自分の住んでいる地域に 住むのは歓迎だ (ハイスキル外国人を受容)	34.0%	9.4%	24.7%	50.4%	8.4%	7.2%
単純労働に従事する外国人が自分の住んでいる 地域に住むのは歓迎だ (単純労働外国人を受容)	24.3%	6.2%	18.2%	54.1%	12.4%	9.2%

階層意識では「自分は世の中では上流だと思う (上流意識)」: 10.2%, 「自分は世の中では下流だと思う (下流意識)」: 36.0%, 「今住んでいる街は、人間関係が濃密だ (人間関係が濃密)」: 19.5%, 「今住んでいる街には、自分と似たような属性の人が多く (自分と似た人が多い)」: 26.0%, 「ハイスキルの外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ (ハイスキル外国人を受容)」: 34.0%, 「単純労働に従事する外国人が自分の住んでいる地域に住むのは

歓迎だ (単純労働外国人を受容)」: 24.3%となっており、階層意識の分離が一定程度進んでいること、外国人の属性によって受容度が異なることを示している。

2. 区市町村を対象とした記述統計分析

表-3は、上流・下流意識に関する「自分は世の中では上流だと思う (上流意識)」自分には世の中では下流だと思う (下流意識)」という設問、コミュニティへの意識に関する

「今住んでいる街は、人間関係が濃密だ（人間関係が濃密）」「今住んでいる街には、自分と似たような属性の人が多く（自分と似た人が多い）」という設問、外国人受容意識に関する「ハイスキルの外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ（ハイスビル外国人を受容）」「単純労働に従事する外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ（単純労働外国人を受容）」という設問の合計6項目について自治体毎に集計し、回答者50名以上の自治体を対象として集計した記述統計量である。

各項目の評点は、そう思う:2、どちらかといえばそう思う:1、どちらでもない:0、どちらかといえばそう思わない:-1、そうは思わない:-2と回答をそれぞれ得点に換算し、その平均点を自治体毎に集計した。

集計対象となった自治体は857と日本の全市区町村約1900の半数弱となっている。上流意識の平均は-0.75と低く多くの自治体では上流意識は低い、下流意識の平均は0.24となっている。人間関係については人間関係が濃密だという傾向はあまり強くなく、自分と似た人が多いという設問に対しては、-0.02と中立的（どちらでもないが多い）となっている。

外国人受容意識では、ハイスビル外国人の受容度が0.20であるのに対して、単純労働外国人の受容度は0.01と中立的な結果となっている。

表-4は、居住自治体の各項目の平均値の相関係数を算出した結果である。

相関係数を見ると、「上流意識」と「下流意識」の相関

係数-0.58、「ハイスビル外国人受容」と「単純労働外国人受容」が0.44となっているが、これらの項目間で一定の相関関係があるのは当然である。

「下流意識」と「人間関係が濃密」の相関係数は0.35だが、「上流意識」との相関係数は-0.17と符号が逆転しており、下流意識の強い人が住んでいる地域では人間関係が濃密であるのに対して、上流意識の強い人が住んでいる地域では人間関係が希薄である、ということを示唆している。

「上流意識」と「自分と似た人が多い」の相関係数は0.43だが、「下流意識」との相関係数は、-0.36と符号が逆転しており、上流意識の強い人が住んでいる地域は、住民の均質性が高く、下流意識の強い人が住んでいる地域では住民の多様性が高い、ということを示唆している。

外国人受容度については、「上流意識」と「ハイスビル外国人を受容」の相関係数は0.31だが、「下流意識」との相関係数は-0.18と符号が逆転しており、上流意識の強い人は、自分と似たような傾向を持つ可能性が高い、ハイスビル外国人を受入れる傾向があるのに対して、下流意識の強い人は逆に自分とは違う人達だと認識して受容度が低下している可能性がある。

一方、「上流意識」と「単純労働外国人を受容」の相関係数は、-0.02とほぼ相関はないが、「下流意識」との相関係数は0.28となっており下流意識の強い人が多い地域のほうが単純労働外国人を受入れる受容度が高いことを示している。

表-3 上流・下流意識、コミュニティへの意識、外国人受容意識の自治体毎の記述統計量

	自治体数	平均	標準偏差	最小	最大
自分は世の中では上流だと思う（上流意識）	857	-0.75	0.13	-1.13	-0.14
自分は世の中では下流だと思う（下流意識）	857	0.24	0.15	-0.30	0.94
今住んでいる街は、人間関係が濃密だ（人間関係が濃密）	857	-0.19	0.20	-0.67	0.60
今住んでいる街には、自分と似たような属性の人が多く（自分と似た人が多い）	857	-0.02	0.12	-0.40	0.33
ハイスキルの外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ（ハイスビル外国人を受容）	857	0.20	0.11	-0.15	0.57
単純労働に従事する外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ（単純労働外国人を受容）	857	0.01	0.11	-0.40	0.40

表-4 上流・下流意識, コミュニティへの意識, 外国人受容意識の自治体毎の相関係数

	自分は世の中では上流だと思う	自分は世の中では下流だと思う	今住んでいる街は、人間関係が濃密だ	今住んでいる街には、自分と似たような属性の人が多く	ハイスキルの外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ	単純労働に従事する外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ
自分は世の中では上流だと思う (上流意識)	1					
自分は世の中では下流だと思う (下流意識)	-0.58	1				
今住んでいる街は、人間関係が濃密だ (人間関係が濃密)	-0.17	0.35	1			
今住んでいる街には、自分と似たような属性の人が多く (自分と似た人が多く)	0.43	-0.36	-0.14	1		
ハイスキルの外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ (ハイスکیل外国人を受容)	0.31	-0.18	-0.03	0.35	1	
単純労働に従事する外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ (単純労働外国人を受容)	-0.02	0.28	0.39	0.07	0.44	1

相関係数0.3以上を背景グレー

3. 個人を対象とした記述統計分析

表-5は自治体の記述統計量と同様の項目を、個人を対象として集計したものである。

上流意識、下流意識などの6項目とも平均値は自治体の値とほぼ一致しており、上流意識を持つ人は少ないが、下流意識を持つ人は比較的多いことを示している。

一方で標準偏差は自治体の標準偏差よりも個人の標準偏差のほうが大きい。これは、自治体には上流意識を持つ人が多い場所、少ない場所といったように自治体毎に住民の傾向が異なることを示している。

表-6は自治体と同様の項目を、個人を対象として相関係数を算出した結果で、6項目間の相関係数は自治体を対象に集計した場合と大きく異なる結果となっている。

「上流意識」と「下流意識」の相関係数-0.58、「ハイスکیل外国人受容」と「単純労働外国人受容」が0.44と一定の相関関係があるのは当然だが、それ以外には相関関係が0.3を超えるものがない。

この結果は個々人で見れば上流意識は「人間関係が濃密」「自分と似た人が多く」といった地域の人間関係への認知と若干の相関関係がありそうだが、下流意識とは相関がなく外国人への受容度については階層意識との関係がほぼない、ということを示唆している。

4. 個人を対象とした上流・下流意識, 外国人受容意識のロジスティック回帰分析

階層意識と地域の人間関係への認知および外国人受容度について、個人を対象としたデータでは相関関係があまり見られないのに対して、自治体を対象に集計したデータでは一定の相関関係が見られた。

この背景には、個人単位では相関関係が見られないが、自治体単位で見ると各項目が相関がしている傾向のある個人が特定の自治体に集まり、自治体単位で集計した結果に相関関係が生まれている可能性が考えられる。

それを検証するために、上流・下流意識、とハイスکیل外国人・単純労働外国人受容度を目的変数として、個々人の属性等に自治体の平均値を説明変数に用いてロジスティック回帰分析を行った結果が表-7である。サンプルサイズが16万6,268名と全回答者18万4,031名より少なくなっているのは、回答者が50名未満だった自治体の居住者が分析から除外されているためである。

それぞれのロジスティック回帰の結果からは、以下のようなことが分かる。

階層意識の構造には違いがあり、上流意識に対しては、才能に自信がある (オッズ比: 2.17 以下同じ)、収入には大変満足している (2.37)、社会的地位に大変満足してい

る (2.06) といったものがプラスに働いており、下流意識に対しては、生活保護ダミー (1.83)、家賃の安い街に住みたい (1.5)、日本は格差社会だと思う (1.9)、収入や社会的地位等に劣等感を感じる (4.9)、老後の生活資金が足りるか不安である (2.56) といった項目が影響している。

ハイスル外国人の近隣居住の受容に対してオッズ比 1.5 を超える項目には、出身者でなくてもなじめる街に住みたい (1.56)、SDGs・ESG は重要な社会問題だ (1.71)、社会の格差はある程度は仕方無い (1.55) といったものがあり、単純労働外国人の近隣居住の受容に対してオッズ比 1.5 を超える項目はなく 1.3 を超える項目には、生活保護ダミー

(1.37)、自分は世の中で下流だと思う (1.34)、社会的地位には大変満足している (1.33)、SDGs・ESG は重要な社会問題だ (1.47) がある。

外国人受容度に対する自治体平均の数値では、単純労働外国人の近隣居住の受容に対して、下流だと思う自治体平均がオッズ比 1.33、人間関係が濃密だと思う自治体平均がオッズ比 1.48 となっている。

これは、個々人の単位でみれば下流意識と単純労働外国人の受容度に相関がないのにも関わらず、地域全体の単純労働外国人への受容度が、個々人の意識に影響を与えている可能性を示唆している。

表-5 上流・下流意識、コミュニティへの意識、外国人受容意識の個人の記述統計量

	回答者数	平均	標準偏差	最小	最大
自分は世の中では上流だと思う (上流意識)	184,031	-0.73	1.04	-2.00	2.00
自分は世の中では下流だと思う (下流意識)	184,031	0.21	1.11	-2.00	2.00
今住んでいる街は、人間関係が濃密だ (人間関係が濃密)	184,031	-0.23	0.97	-2.00	2.00
今住んでいる街には、自分と似たような属性の人が多い (自分と似た人が多い)	184,031	-0.01	0.95	-2.00	2.00
ハイスルの外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ (ハイスル外国人を受容)	184,031	0.21	0.98	-2.00	2.00
単純労働に従事する外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ (単純労働外国人を受容)	184,031	0.00	0.96	-2.00	2.00

表-6 上流・下流意識、コミュニティへの意識、外国人受容意識の個人の相関係数

	自分は世の中では上流だと思う	自分は世の中では下流だと思う	今住んでいる街は、人間関係が濃密だ	今住んでいる街には、自分と似たような属性の人が多い	ハイスルの外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ	単純労働に従事する外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ
自分は世の中では上流だと思う (上流意識)	1					
自分は世の中では下流だと思う (下流意識)	-0.35	1				
今住んでいる街は、人間関係が濃密だ (人間関係が濃密)	0.18	-0.02	1			
今住んでいる街には、自分と似たような属性の人が多い (自分と似た人が多い)	0.20	-0.08	0.22	1		
ハイスルの外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ (ハイスル外国人を受容)	0.08	0.02	0.09	0.12	1	
単純労働に従事する外国人が自分の住んでいる地域に住むのは歓迎だ (単純労働外国人を受容)	0.09	0.07	0.14	0.12	0.44	1

相関係数 0.3 以上を背景グレー

地域住民の階層意識と地域の人間関係に対する認知及び外国人に対する受容度の関係

表-7 上流・下流意識、外国人受容意識の個人のロジスティック回帰分析結果

目的変数		自分は上流だと思 う	自分は下流だと思 う	ハイスキル外国 人の近隣居住を 許容する	単純労働外国 人の近隣居住を 許容する
サンプルサイズ		166,268	166,268	166,268	166,268
	うち目的変数に対してyesと回答した人数	10.2%	36.0%	34.0%	24.3%
疑似決定係数		0.221	0.258	0.137	0.126
		オッズ比	オッズ比	オッズ比	オッズ比
性別等	女性ダミー	0.79 ***	0.70 ***	0.99	0.94 ***
	既婚ダミー	1.10 ***	0.65 ***	0.95 ***	0.98
	子どもありダミー	0.96 *	0.99	0.93 ***	0.98
年齢	30歳代ダミー	0.75 ***	1.09 ***	0.83 ***	0.70 ***
	40歳代ダミー	0.74 ***	0.97	0.74 ***	0.51 ***
	50歳代ダミー	0.71 ***	0.77 ***	0.67 ***	0.42 ***
	60歳代ダミー	0.62 ***	0.71 ***	0.67 ***	0.40 ***
	70歳代ダミー	0.53 ***	0.70 ***	0.68 ***	0.37 ***
学歴等	大卒ダミー	1.40 ***	0.69 ***	1.25 ***	0.96 ***
	無職ダミー	1.00	1.31 ***	0.97	0.93 ***
	生活保護ダミー	1.60 ***	1.83 ***	1.11 **	1.37 ***
	持ち家ダミー	1.08 ***	0.83 ***	0.96 ***	0.95 ***
	年収1000万以上ダミー	1.31 ***	0.85 ***	0.96 ***	0.99
自己認知	才能に自信がある	2.17 ***	0.85 ***	1.24 ***	1.22 ***
	未来は明るいと思う	1.34 ***	0.72 ***	1.19 ***	1.26 ***
街への印象	外国人が多い	1.16 ***	1.18 **	1.36 ***	1.36 ***
	包容力がある	1.08 ***	0.97 **	1.40 ***	1.46 ***
	人間関係が濃密だ	1.35 ***	1.21 ***	1.21 ***	1.41 ***
	自分と似た人が多い	1.35 ***	0.99	1.27 ***	1.22 ***
街への志向	行政サービスの良い街に住みたい	0.94 ***	0.91 ***	1.44 ***	1.23 ***
	出身者でなくてもなじめる街に住みたい	0.91 ***	0.99	1.56 ***	1.44 ***
	おしゃれで洗練された街に住みたい	1.77 ***	0.93 ***	1.36 ***	1.20 ***
	資産価値の高い街に住みたい	1.41 ***	0.88 ***	1.27 ***	1.04 ***
	物価の安い街に住みたい	0.74 ***	1.28 ***	1.07 ***	1.02
	家賃の安い街に住みたい	0.84 ***	1.50 ***	1.01	1.24 ***
格差意識	自分は世の中では上流だと思 う			1.34 ***	1.42 ***
	自分は世の中では下流だと思 う			1.13 ***	1.34 ***
	日本は格差社会だと思 う	1.19 ***	1.90 ***	1.18 ***	0.98
	収入や社会的地位等に劣等感を感じる	1.31 ***	4.90 ***	1.16 ***	1.18 ***
	老後の生活資金が足りるか不安である	0.65 ***	2.56 ***	1.06 ***	0.99
外国人受容	ハイスキル外国人を受容	1.25 ***	1.02		
	単純労働外国人を受容	1.33 ***	1.37 ***		
満足度	家族関係には大変満足している	0.81 ***	0.78 ***	1.09 ***	1.03 **
	仕事には大変満足している	1.15 ***	1.00	1.16 ***	1.19 ***
	収入には大変満足している	2.37 ***	0.84 ***	1.16 ***	1.16 ***
	社会的地位には大変満足している	2.06 ***	0.91 ***	1.25 ***	1.33 ***
	SDG's・ESGは重要な社会問題だ	0.82 ***	0.80 ***	1.71 ***	1.47 ***
	社会の格差はある程度は仕方無い	0.94 ***	0.90 ***	1.55 ***	0.90 ***
	社会の格差は解消されるべきである	0.66 ***	1.25 ***	1.26 ***	1.18 ***
自治体平均	上流だと思 う（上流意識）			1.10	0.90
	下流だと思 う（下流意識）			0.97	1.33 ***
	人間関係が濃密だ	0.80 ***	1.10 **	1.11 ***	1.48 ***
	自分と似た人が多い	1.09	0.77 ***	0.97	0.90
	ハイスキル外国人を受容	1.31 **	0.69 ***		
	単純労働外国人を受容	0.85	1.09		
定数校		0.04 ***	0.21 ***	0.11 ***	0.13 ***

ハイスキル外国人受容・単純労働外国人需要, 上流・下流それぞれ0.2以上の差がある係数の背景グレー

***は1%有意で, **は5%有意で, *は10%有意であることを示す

V. 考察および今後の課題

もとより社会のなかで格差が拡大すること、階層意識が分離し固定化することは望ましいことではないが、今回の分析結果からは、自分が上流だと思おうという回答者比率が10.2%、下流だと思おうという回答者比率が36.0%と階層意識の分離が一定程度あることが分かった。

外国人が自分の住んでいる地域に住むことに対する受容性も、ハイスキル外国人に対しては34.0%だが、単純労働外国人に対しては24.3%と差があることも分かった。

また、個々人の単位でみれば、階層意識と外国人受容度には相関があまりないが、個々人の集合体としての自治体毎で集計した数値では一定の相関があることが分かった。

この個人と自治体単位の傾向の違いの要因は、はっきりしないが、地域全体の単純労働外国人への受容度が個々人の意識に影響を与えている可能性がある。

また、階層意識、外国人に対する受容度にも一定の構造があることが分かった。

こうした結果からは、自治体を一つの経営体として考えた時、外国人をどのように受入れていくか、多面的に検討する必要があることを示唆している。

今後の課題としては、社会での格差の拡大に対する対応策を検討するために階層意識に特化した分析を行うことが考えられる。また居住地域の状況が階層意識にどのような影響を及ぼすのかといったことが分かれば、個々人の状況を改善するだけでなく、地域の状況を改善することで階層意識、格差を抑制することができる可能性があるからである。

また、地域・自治体毎の外国人の受容度に特化した分析を行うことも考えられる。自治体の人口や年齢構成、経済状況等によって受容度が変わる可能性があるからである。

本研究の成果を含め、そうした今後の研究成果は人口減少時代の自治体経営に有益な情報を提供できるはずである。

なお、本研究では住民の階層意識や外国人受容度に関する個別自治体のデータは、倫理的配慮から掲載していないが、公共性の高い利用目的の場合は個別検討するので、お問い合わせいただきたい。

引用文献

- 向井有理子・池上知子（2010）「移動志向性及び移動経験が外国人受容に及ぼす影響」日本心理学会大会発表論文集 74 (0), 2EV020-2EV020
- 向井有理子（2007）「自尊心と外国人受容：日本・韓国・台湾の調査から」都市文化研究 9, pp.20-3
- 安達理恵（2008）「日本人の異文化受容態度にみられる傾向：一地方都市での年代別・国別態度調査より」名古屋外国語大学外国語学部紀要 35, pp.153-173
- 中村真（1999）「日本人の人種・民族：ステレオタイプと偏見」現代のエスプリ, 至文堂, pp.87-98
- 永吉希久子（2018）「階層意識研究の現在」社会学研究 101 (0), pp. 1-10
- 中尾啓子（2002）「階層帰属意識と生活意識」理論と方法 17 (2), pp.135-149
- 小林大祐（2004）「階層帰属意識に対する地域特性の効果」社会学評論 55 (3), pp.348-366